

Elevate Shimbashi

—移動が価値になる街へ—



01 交通とビジネスが交差する街・新橋

■都市の結節点

「新橋」という地名は、旧汐留川に架けられた「新しい橋」由来し、江戸市中と湾岸部を結ぶ結節点として機能してきた。明治には日本初の鉄道ターミナルが設置され、近代交通の出発点として都市構造における重要なノードとなった。現在も人・物・情報が交錯する交通の基盤としての役割を担う。



■「サラリーマンの聖地」

新橋は、交通の要所であり、銀座や汐留、虎ノ門といった主要ビジネスエリアに囲まれ、古くから企業の本社や支社が集まるオフィス街として発展してきた。そのため長閑な周辺がオフィスで働くビジネスパーソンでにぎわい、夜になると駅周辺の地下街ガード下に広がる居酒屋や飲食店にサラリーマンが集まる。この「職場と飲み場の隣り合う」環境が、「サラリーマンの聖地」という呼び名を確立した。



02 静と動の乖離

新橋は長年「サラリーマンの聖地」として発展してきた一方で、日中はオフィス街特有のせわしい雰囲気や交通、人々の往来がほとんど感じられない。そのため、街は通勤や移動の通過点としての機能が中心となり、ゆっくり滞在したり、立ち寄りやすくなる魅力に乏しいのが現状である。結果として、新橋は「働く人が集まる街」でありながら、「滞在を楽しむ街」としての面を持ちきれない。街路の動的な移動空間と建物の静的な内部空間との間には大きなギャップがあり、人間のスケール感から離れているため、建築や空間が人の動きを受け止め、導く機能として機能できなくなっている。



03 移動の再定義

新橋は多くの人が行き交う街であり、通勤や移動の「通過点」としての役割が強く意識されてきた。しかし、それからの新橋に求められるのは、単なる移動の効率性だけでなく、その移動自体が新たな価値や体験を生み出す場となることである。従来、私たちは階段やエスカレーター、エレベーターといった手段を使い、速やかに目的地へ向かうことに重きを置いてきた。特にエレベーターは垂直移動の機能的装置としての役割にとどまっていたが、これらは移動の速度やルート、身体の動きを可視化し、空間としての魅力を高めることで、移動そのものが都市の新しい体験としての価値を生み出せるかもしれない。街の動きが建物内部に浸透し、建物の内部から人の動きが溢み出す。こうした相互の動きの連続性が高まることで、都市に一体感が醸成され、通過点である新橋が「滞在し、楽しむ街」へと進化していくのではないだろうか。



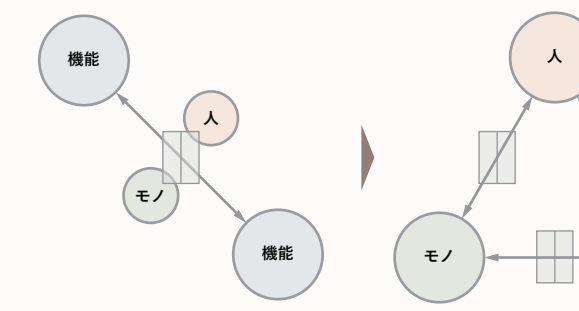
04 エレベーターの新しい形

■ワイヤロープのいないエレベーター

	従来型	リニア駆動型
駆動方式	ワイヤロープ・モーター	リニアモーター・駆動
移動方向	上下	上下・水平・斜め
運送方式	1ユニット・1キャビン	複数のユニットで連続して移動
エネルギー効率	低	高

近年、建物内の移動手段として、従来の上下移動しかできないエレベーターとは異なる、新しいモビリティが登場している。それがリニア駆動型エレベーター。これは、ワイヤロープを使わず、磁力を利用したリニアモーターでキャビンを直接動かす方式を採用しており、上下だけでなく水平や斜め方向への移動も可能にする。この技術によって、エレベーターは単なる「縦の移動装置」から、「建物内を自由に行き来できる交通システム」へと進化できる。移動に新たな価値を作り出せる未来型の移動インフラといえる。

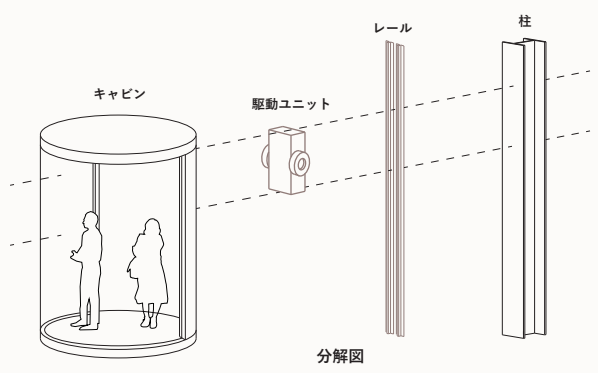
■新たなエレベーターのあり方



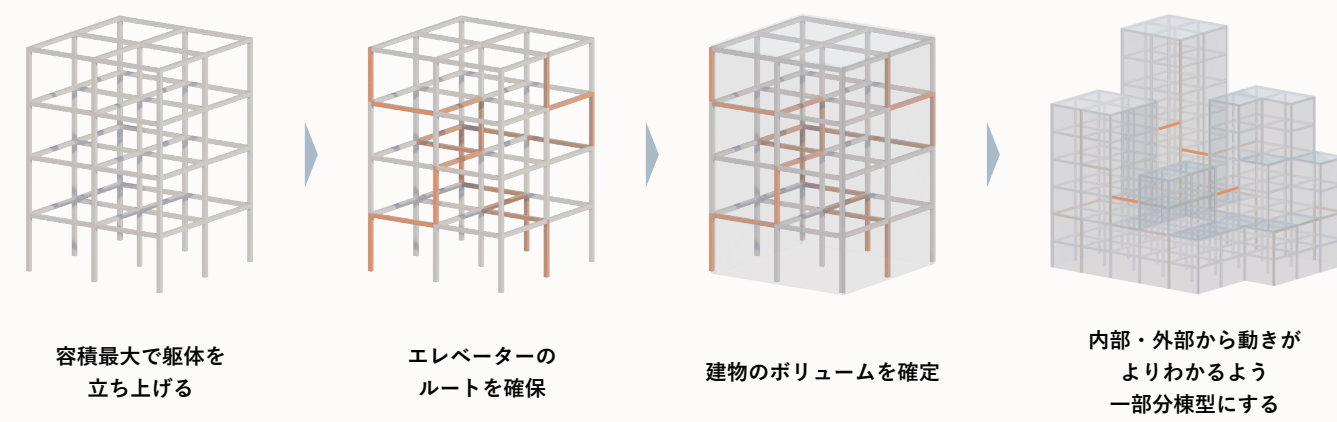
これまでエレベーターは、人・モノの機能間の移動を担う装置に過ぎなかった。しかし、リニア駆動型の新しいエレベーターは、その役割を大きく拡張できる。人・モノの移動に加えて、新たな価値を持たせることができる。オンラインオーダーした商品を各階や各部屋でエレベーターから受け取れるサービスや、カフェやコンビニなどの機能を搭載し移動させることで、建物内の任意の場所に一時的なサービス拠点を展開することもできる。エレベーターは、単なる垂直交通機関から、人・モノ・機能を結びつける動的なインフラへと進化することができる。

■躯体 × エレベーター

本計画では、ビルの躯体を構成する柱や梁にリニアエレベーター用のレールを直接組み込み、構造体と移動システムを一体化する。これにより、移動装置が建築内部に自然に溶け込み、設備スペースを最小限に抑えながら、建物全体を縦横無尽に移動可能な立体的モビリティネットワークを形成することができる。従来のように垂直シャフトに依存せず、上下・水平・斜めへと自由に方向転換できるため、利用者は階や棟の境界を意識することなく、目的地を目指すことができる。あえて最短距離のルートを設定しないことで、エレベーター内部での時間を移動のみではなく、場面の変化や他人の存在を感じられる新たな体験としての価値を生み出せる。

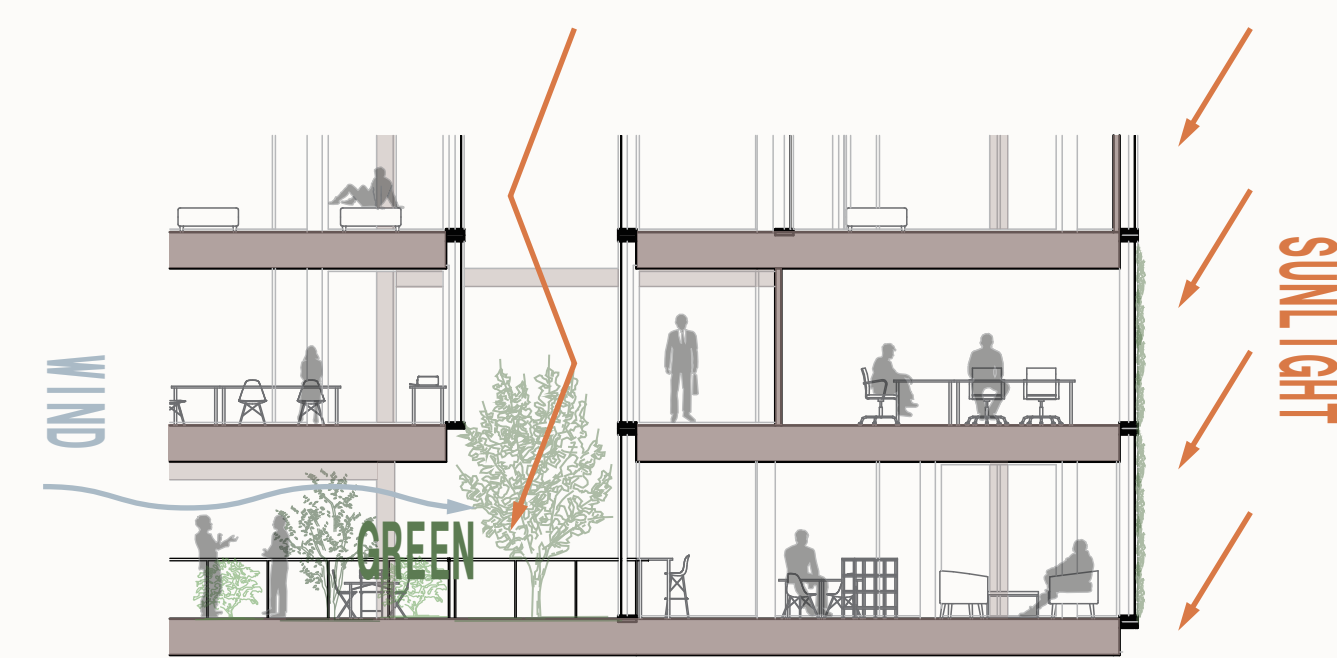


05 形態ダイアグラム



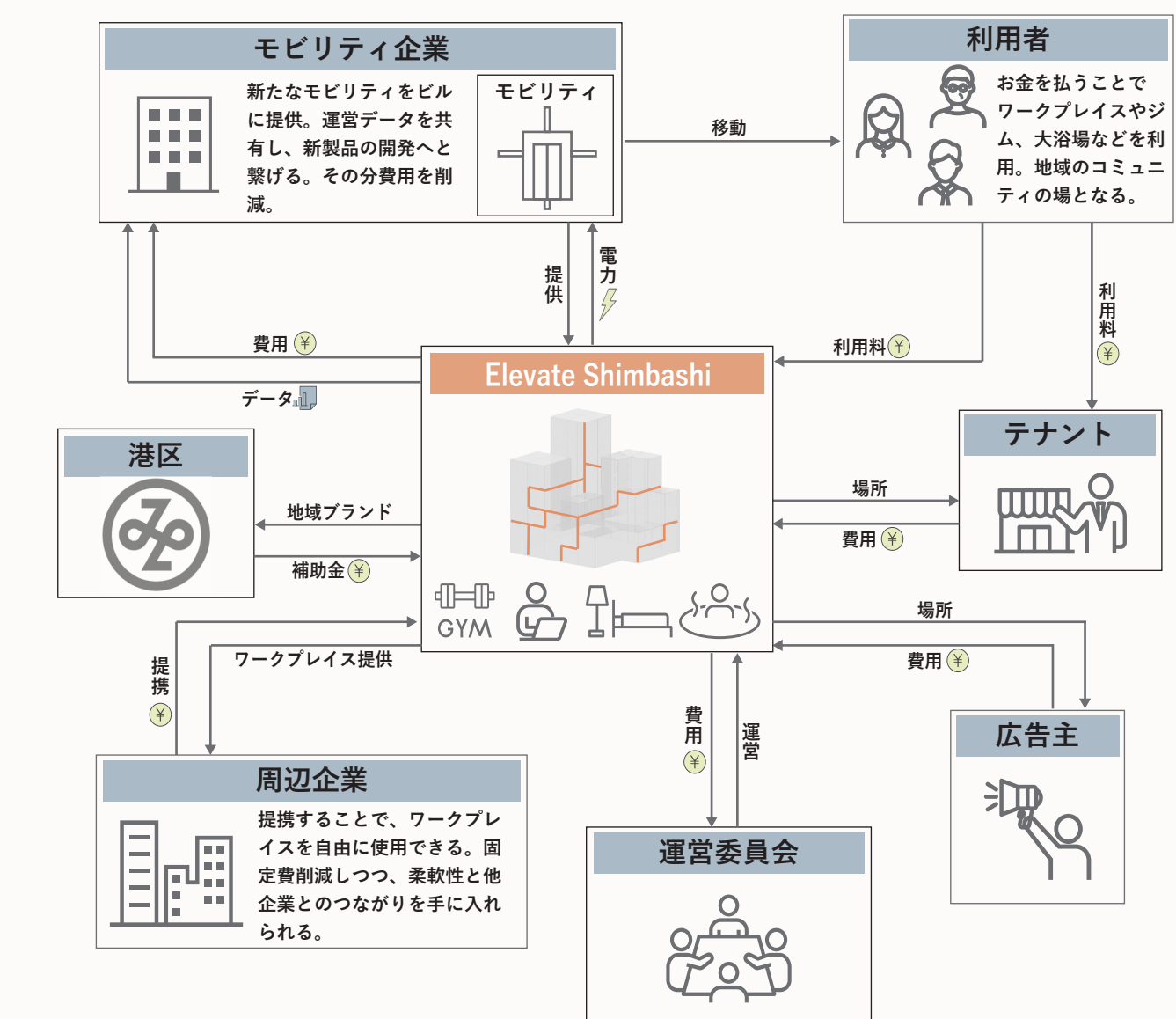
06 分棟配置による環境性能向上計画

分棟型の建物配置を採用し、棟間に豊かな日射と風の通り道を確保。これにより、日光は外壁や地面の反射を介して低層部や屋外空間の奥深くまで自然光を届けるとともに、風は棟間の通風経路を通してビル内の各所に届けられた屋外空間へと効果的に導かれ、安定した自然通風環境の実現が可能である。さらに、屋上および屋外空間には緑化を施し、植栽による蒸散作用と日射遮蔽効果により、都市部特有のヒートアイランド現象の緩和を図る。加えて、外壁面の緑化は壁面の断熱性能を補強し、建物全体の熱負荷軽減に寄与するだけでなく、周辺の微気候改善にも貢献。建物の外壁面には太陽光パネルを設置し、建築立面を有効活用した再生可能エネルギーの創出を実現。これにより、エレベーター稼働に必要な電力の一部を自給し、CO₂排出量の削減に寄与するとともに、持続可能なエネルギー利用の推進を目指す。



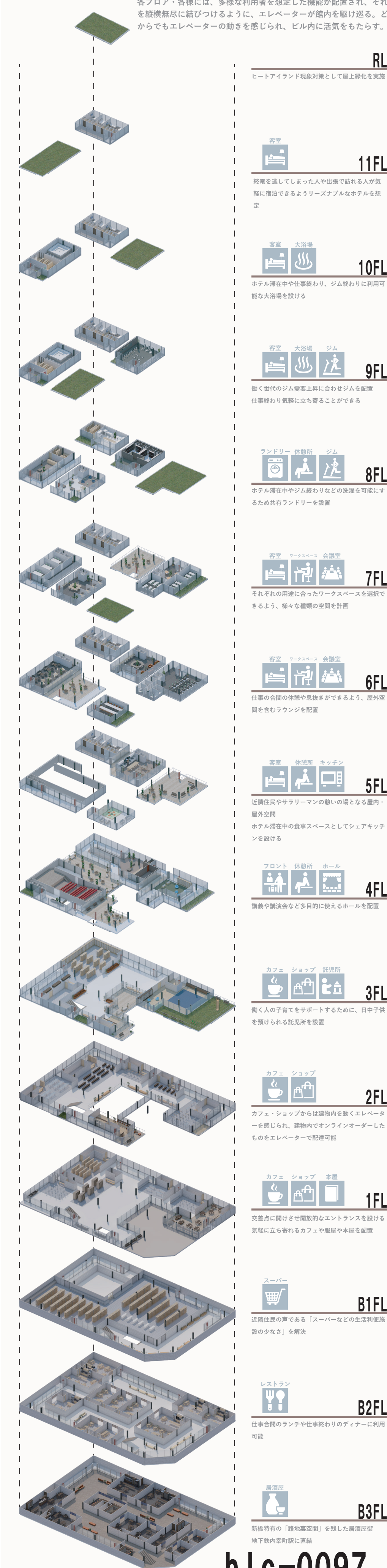
07 次世代モビリティを核とした循環スキーム

サラリーマンの街という立地の強みを活かし、企業のサテライトオフィスやフリーランス向けのワークプレイスを月額会員制で提供。また、サラリーマンのランチ・飲みニーズに応える多様なレストランや居酒屋を整備。国際化の情勢を元に、ショッピングができる観光客向けの施設も配置している。



08 フロアガイド

各フロア・各棟には、多様な利用者を想定した機能が配置され、それらを縦横無尽に結びつけるように、エレベーターが室内を駆け巡る。どこからでもエレベーターの動きを感じられ、ビル内に活力をもたらす。



RL

ヒートアイランド現象対策として屋上緑化を実施

客室 11FL

終電を逃してしまった人や出張で終電の人が気軽に利用できるようリーズナブルなホテルを想定

客室 大浴場 10FL

ホテル滞在中や仕事終わり、ジム終わりに利用可能な大浴場を設ける

客室 大浴場 ジム 9FL

働く世代のジム需要上昇に合わせてジムを配置。仕事終わり疲れた体を癒やすことができる

ランドリー 休憩所 ジム 8FL

ホテル滞在中やジム帰りなどの洗濯を可能にするため共有ランドリーを設置

客室 ワークスペース 会議室 7FL

それぞれの用途に合ったワークスペースを選択できるように、様々な種類の空間を計画

客室 ワークスペース 会議室 6FL

仕事の合間の休憩や息抜きができるよう、屋外空間を含みランジを設置

客室 休憩所 キッチン 5FL

近隣住民やサラリーマンの憩いの場となる屋内、屋外空間。ホテル滞在中の食事スペースとしてシェアキッチンも設ける

フロント 休憩所 客室 4FL

議決や議決会など多目的に使えるホールを配置

カフェ ショップ 託児所 3FL

働く人の子育てをサポートするために、自中子供を預けられる託児所を設置

カフェ ショップ 2FL

カフェ・ショップからは建物の魅力をエレベーターを通じて、建物内でオンラインオーダーしたものをエレベーターで配達可能

カフェ ショップ 本館 1FL

交差点に開けさせ開放的なエントランスを設ける。気軽に立ち寄れるカフェや無償で本館を配置

スーパー B1FL

近隣住民の生活である「スーパーなどの生活利便施設」を解決

レストラン B2FL

仕事合間のランチや仕事終わりのディナーに利用可能

新橋駅 B3FL

新橋特有の「路地裏空間」を残した路地裏型地下鉄内準駅に直結

hlc-0097